第２章　調査結果から見た「学習の成果を適切に生かす」公民館の役割

第１節　調査結果の考察

１　「学習の成果を生かす」とは

（１）「学習の成果を生かす」ことの背景

平成１８年の教育基本法の改正により、その第三条に初めて「生涯学習の理念」が規定された。その条文を詳細に見れば、

〇国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう
〇その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ
〇その成果を適切に生かすことのできる
〇社会の実現が図られなければならない

とすることができる。

すなわち、この理念は「国民一人一人が豊かな人生を送ることができる」ことを目指しており、そのために「あらゆる機会と場所において学習することができる」環境づくりと「その成果が適切に生かされる」場の整備が求められている。このような「社会の実現を図る」のは、学習の主体者である国民（地域住民）と、それを支援するために学習の場や環境を整える生涯学習･社会教育関係者である、と解釈することができるであろう。

また、同法第十二条「社会教育」の項目の中では、「個人の要望や社会の要請にこたえ、社会において行われる教育は、国及び地方公共団体によって奨励されなければならない」とし、「国及び地方公共団体は、図書館、博物館、公民館その他の社会教育施設の設置、学校の施設の利用、学習機会及び情報の提供その他の適当な方法によって、社会教育の振興に努めなければならない」と規定されている。

さらに、社会教育法の改正や審議会の答申等において、例えば「新しい公共」の考え方が提示されたり、学習の成果を幅広く生かす具体的な例示等が示されたりしてきた。

こうした流れの中、県では平成２３年度に、秋田県生涯学習ビジョンを策定し、本県生涯学習が目指す将来像を「知と行動が結びついたクリエイティブな循環型社会」と定めた。ここでは、学んだ成果を行動につなげ、社会に生かす人を「行動人(こうどうびと)」と呼び、「すべての県民が行動人になる」ことを目標に掲げた。

このような状況の下で、県内でも各公民館を中心として、「生涯学習の理念」や「社会教育」の規定に沿う形で、地域の実態に合った様々な取組が展開されてきている。

それでは、「学習の成果を適切に生かす」ということを私たちはどのように理解すればよいのだろうか。調査結果を分析･考察する前に、この点について考察を加えたい。

（２）「学習の成果を生かす」とは

私たちが何かを学びその学びを生かすという行為は､日常のいたる所で行われている。それは、意図的な教育活動として行われている場合もあれば、無意図的に日常生活の中で学び、その成果を生かしている場面もある。「生涯学習」は、それらを含めた学びの総てをいう。また、各個人が行う学習は、他から強制されるものではなく、その自発的な意思に基づいて行われることが生涯学習の大前提である。

一方、これを支援するために、学習の場や環境を整える生涯学習･社会教育関係者の側に立てば、限られた財政的かつ人的資源を投入することを踏まえて、地域住民の実生活の豊かさにつながるための取組が選択的に行われなければならない｡このことからも、個人の要望と社会の要請に関わる取組は、よりバランスが取れた状態で施策が講じられることが求められているといえよう。

このように考えると、「学習の成果を適切に生かす」ということは、学習者の側に立てば、学習したことによって自己の人格が磨かれ、豊かな人生を送ることができるよう日常の生活の中に生かされることであり、他の人々がそのような状態になれるように地域や社会において、自分が学習した成果を発揮する場が得られるということでは

ないだろうか。
　また、それを支援する生涯学習・社会教育関係者の視点に立てば、住民が自らの意思に基づいて豊かな学習活動に励むことができる環境を整え、そのような環境を整えるために住民らと協働して地域の活性化に向けて取り組む場を築き上げるということではないだろうか。
　本節では、こうした視点に立って本調査で得られた集計結果を基に考察した。

２　公民館で行われている「学習の成果を生かす」ことにつながる取組

（１）個人の要望と社会の要請に沿った取組

　今回の調査で最も顕著であったのは、学習の成果を生かすことにつながる講座や活動その他の取組が､個人の要望を重視した趣味や教養的な講座等の取組に偏る傾向があり、それに比べて新しい公共の考え方や社会の要請に応じた現代的な課題の解決、地域の活性化に向けた取組等が少ないということである（Ｐ７～９）。
　しかし一方では、多くの公民館で、地域の実態に応じた特色のある実践が行われているという事実も具体的な記述による回答で明らかになった。
　ここでは、住民が参画して地域の教育力を高めていると思われる講座や取組の一部を紹介する。

○秋田市中央公民館他市内各公民館「地域づくり自主企画事業」（Ｐ５３）
～公民館運営協力員が地域に合った事業を自主的に企画、今年度中央公民館では、普段口にしている野菜の生産、流通の現場を訪問し、安全な野菜作りについて学んだ。
○横手市中央公民館「よこてのいいとこ巡り隊」（Ｐ６２）
～退職した高校の教師を講師に迎え、地元でもあまり知られていない歴史や事象について学ぶ。受講生が新たな講師となって次世代に伝えていくことを目標としている。
○横手市栄公民館「お気楽ものづくりサロン」（Ｐ６２）
～公民館に気楽に集まり、集まった人同士が講師になったり、生徒になったりしながら交流を深め合う。
○横手市山内公民館「アイディア料理コンテスト in さんない」（Ｐ６３）
～コンテストの入賞者が講師となり、料理教室を開催。産業課と連携して新商品を開発したり販売したりして観光につなげた。
○美郷町公民館「みさと世話好きマイスター」（Ｐ６１）
～マイスター養成講座の修了生が独自に結成。地域の物知り博士として公民館と連携してわくわくスクール等を企画・運営している。
○鹿角市花輪市民センター「鹿角ご近所の底力！『花輪の地域防災を考える会』」（Ｐ４９）
～自治会を中心に互いの連携を図り、いざというときに備えるための準備をしたり考えたりする会を実施した。
○能代市中央公民館「高校生ボランティア育成講座」（Ｐ７９）
～地域で開催されるイベント等様々な機会を捉え、活動に伴う事前学習会を経て実践につなげる。
○由利本荘市中央公民館「家庭教育講座『夏休み親子体験入学』」（Ｐ８３）
～県立大学と協力して、学生が先生になり科学実験や工作教室を行う。参加者にとっては大学構内入って学ぶ体験をすること、学生にとっては講師となって自主性を養うことなど効果が見られる。
○北秋田市中央公民館「北秋田発！『合川まと火交流プロジェクト』」、「生涯学習フェスタ」「ふるさとの未来・再考！フォーラム」等（Ｐ２９、５１、６７、７８）
～小中高校、他地域、各種団体･サークル等が連携を図り、様々なイベントや交流会で地域の活性化を図っている。
　詳しくはＰ２７～９０に掲載しているのでぜひ参考にしてほしい。また、参考にしたい事例があればぜひ当該施設に連絡を取って連携を深めてほしい。

（２）公民館に見られる取組の実態と課題の捉え方

もう一つ目を引いたことは、地域課題の解決や、活性化に向けた取組がよく行われている施設は、一般的な趣味教養的な取組もよく行われている傾向にあるということである。その一方で、課題解決や活性化に向けた取組があまり行われていない施設は、趣味や教養的な取組も十分には行われていないという傾向が見られた（Ｐ８、9）。

こうした取組の実態別に分けた「施設が捉えている課題」の傾向を表すものがＰ１１である。分析で指摘しているように、地域課題の解決や活性化に向けた講座について、あまり取組を行っていない施設は「人的理由」や「講師が見つからない」といった課題を挙げる回答が多く、活性化に向けて取組を多く行っている施設は「社会の要請に基づいた講座を行ったときに人が集まらない」という課題を挙げる回答が多かった。また、そうした取組を一つも行っていない施設は、全項目について「課題として当てはまらない」という回答が他の二者と比べて多いという傾向が顕著に表れた。

もちろん、それぞれの施設で、地域の実情も公民館の体制も異なるので一概に言えるものではないが、職員数の少ない公民館でも特色のある事業を行っている例はたくさんある。ぜひ地域の実態に対する課題意識を高くもちつつ、本報告書の中からも地域の実態に合った参考になる事例を見つけ出し、互いにネットワークを築き上げながら新たな取組に挑戦してもらいたい。

３　公民館利用者が行っている「学習の成果」の生かし方とその指向性

（１）公民館利用者が行っている「学習の成果」の生かし方

個人の要望と社会の要請のバランスが指摘される中で、公民館での活動が趣味や教養等に偏りがちな傾向にあることは、公民館利用者への調査でもＰ１５のグラフ等から読み取ることができる。

学習の成果を生かしている方法としては、公民館への調査同様、日常生活や趣味教養、健康作り等に生かしているとの回答が多く見られ、それと比べると地域の課題解決やボランティア活動等は少ない。しかし、地域課題解決やボランティア活動等に生かしているとの回答も３割程度に達していることから、公民館への調査と比べればその回答は高い割合を示していることがわかる。

（２）公民館利用者が考える「学習の成果の生かし方」

Ｐ１７とＰ１８を見ると、注目すべき結果が見られる。

公民館調査で取組が１割から２割程度にとどまっていたいわゆる「地域づくりや地域の活性化につながる項目について活動をしたいか」という問いに対して、その多くで高い数値が得られたことである。「地域の課題解決や活性化に役立つような活動」や「ボランティア活動」に対しては回答者の７割が「とても」あるいは「少しそう思う」と回答している。

また、「生涯学習の成果を適切に生かすことのできる社会を作るために必要なこと」を問う設問に対しては、全ての項目で「そう思う」という回答が半数を超えていた。

さらに、公民館利用者の中で地域貢献的な活動をしていない人に絞っても、そのような活動を「したい」、あるいは「必要である」と回答した人が、項目によっては半数から７割ほどに達することは特筆すべきことであろう。

つまりこのことは、学習の成果を生かして地域活性化に向けた活動をしたいという人が、実際に活動している人よりも多く存在し、さらに、そういった地域の活性化に向けて地域住民が役に立つ機会を多く作ることが、「生涯学習の成果を適切に生かすことのできる社会を作るために必要だ」と考えている人たちが潜在的に多く存在するということであろう。

４　「学習の成果を生かす」環境を整えるために

（１）地域の潜在的な人的資源の掘り起こしを

これまでにも地域の活性化を考えるとき、地域の人材活用が重要であることは言われてきたが、まだまだ地域の人的資源を有効に活用する余地があることは今回の調査から見ても明らかである。

当センターでは、これまでにも地域マイスター養成講座やチョコボラプロジェクトなどを展開し、地域人材の掘り起こしと養成を行ってきた。平成２４年度からは、秋田県生涯学習ビジョンに対応した県民総「行動人」推進事業において、地域で元気に活躍している人たちに光を当てて事業を展開している。今までは主に取材活動やウェブサイトによる広報活動等を中心に事業を進めてきたが、今後は第３章でも述べるように、さらに行動人と連携を深めた事業を進め、また、行動人同士が連携・交流できるような方向に事業を展開していきたいと考えている。

各市町村のそれぞれの地域においては、当センターが関わってきた多くの人々よりも、さらに多くの人材が、活動する意思をもちながらきっかけを得られないでいることが予想される。地域の最前線に位置する生涯学習の拠点である公民館だからこそ可能になる、地域の教育力を発揮した活性化策に取り組まれることを期待したい。

（２）学習の成果を生かすことと公民館の本来の役割

ここまで、「学習の成果を（適切に）生かす」ことについて、生涯学習・社会教育の拠点施設である公民館とその利用者へのアンケート調査結果から考察してきた。

そこからは、公民館の取組が個人の趣味教養あるいは健康や日常生活への対応といったいわゆる「個人の要望」に偏りがちであり、新しい公共の考えの下に立つ「社会の要請」に対応した取組まで踏み込めていない実態が見えてきた。

ここでもう一度立ち返りたいことは、生涯学習の理念で目指しているのは「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができる」ことである。そのためには、個人の要望に対応した取組を行うことはたいへん重要なことであり、だからこそそのような社会を作るために、社会の要請に応じた地域づくりや、住民の視点に立った住民との協働が必要であると言い得るということである。

そして、そのような「個人の要望」と「社会の要請」のバランスの取れた取組を主導することが、地域の最前線に立つ公民館の大きな役割であるといえよう。

ところが、少子化や行財政改革が進む昨今にあって、公民館を取り巻く環境は厳しさを増している。公民館を指定管理者に任せたり、あるいは公民館そのものを廃止し生涯学習機能を備えた総合的な住民サービス行う施設に再編する自治体も増えてきている。

実際には、公民館と規定されながら十分な職員配置がなされずに、法や答申・指針等に基づいた事業を行えていない施設もあれば、反対に公民館という枠を取り払いながらも、より柔軟に地域の実態に応じ、その地に根ざした事業を積極的に行っている施設も見られる。しかし、「公民館」とこうした施設とで大きく異なるところは、公民館は地域にとって必要な社会教育に関する事業を行う責任を負っている施設であり、そのことが市町村の条例によって明確に定められているということであろう。

公民館が単に貸し館の管理にとどまるのであれば別だが、本来当該地域の生涯学習の根幹をなす社会教育の役割を担うものであり、自治体が条例でその役割を位置づけるならば､公民館の職員体制が真っ先に人員削減の対象になることは実は不自然な話である。むしろ、こうした厳しい状況にある今だからこそ、地域の力を醸成するために公民館が重要であることを再認識し、いわゆる貸し館や趣味･教養講座にとどまらない地域づくりの重要な拠点として、公民館の存在価値を高めるような取組を大いに期待したいところである。

第２節　調査結果の集計・分析

〔調査１〕県内市町村公民館に対するアンケート調査結果

１　施設の概要

（１）市町村名〔　　〕

（２）施 設 名〔　　〕

（３）職員数（　）人（現業職員を除く）

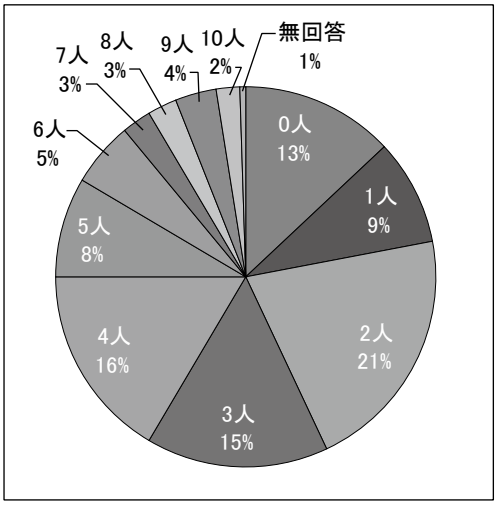
①（３）のうち正職員（　）人、非正規職員（　）人

②（３）のうち専任　（　）人、兼任　　（　）人

③（３）のうち常勤　（　）人、非常勤　　（　）人

（施設）

人数	施設数	正規	非正規	専任	兼任	常勤	非常勤
0人	26	19	16	17	31	21	21
1人	18	46	51	26	43	29	32
2人	42	27	40	25	14	34	22
3人	31	10	18	19	7	14	14
4人	33	10	14	17	1	13	10
5人	17	13	2	9	9	9	2
6人	11	9	1	5	4	6	2
7人	5	7	1	2	2	5	1
8人	5	3	0	0	2	7	0
9人	7	1	0	2	2	2	0
10人	4	0	0	2	1	1	0
無回答	1	55	57	76	84	59	96
計	200	200	200	200	200	200	200

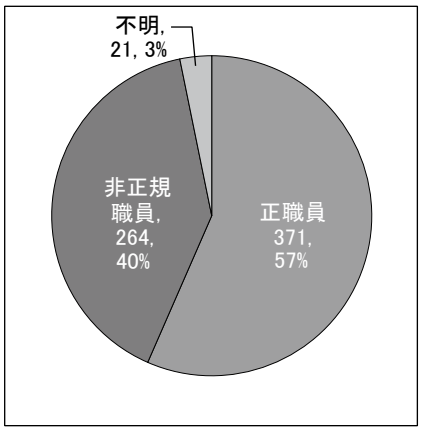


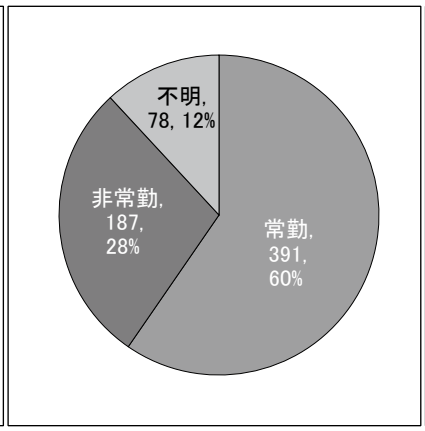
職員総数　656人

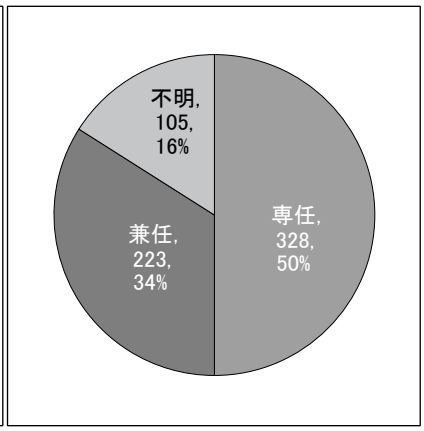
①	（人）
正職員	371
非正規職員	264
不明	21
計	656

②	（人）
常勤	391
非常勤	187
不明	78
計	656

③	（人）
専任	328
兼任	223
不明	105
計	656







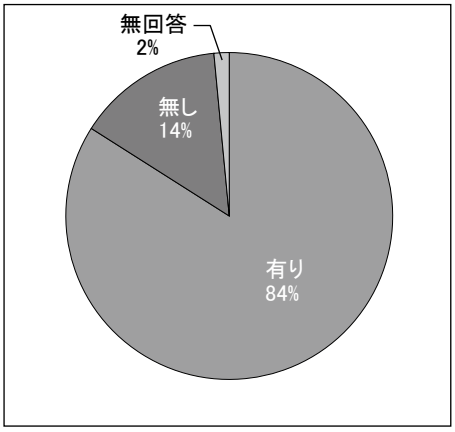
職員が複数いる施設が１５５施設（７７％）で多くを占めるが、「職員数０人」が２６施設（１３％）ある。「２人」が４２施設（２１％）と最も多く、平均は３．３人である。本来条例に定められた公民館であれば、館長や主事が配属されていることが想定され、職員数０人という回答は通常は考えにくいが、施設への聞き取りによれば、役場の支所として部局の職員が兼任発令されずに配置されているケースが見られた。

また職員の内訳は、正職員が３７１人（５７％）、常勤が３９１人（６０％）、専任が３２８人（５０％）であり、それぞれ半数を少し超えている。

（４）主催事業の有無　（有・無）

（施設）

(4)	主催事業有無	
○	有り	168
×	無し	29
	無回答	3
計		200



「主催事業有り」が１６８施設（８４％）、「無し」が２９施設（１４％）である。

主催事業がない２９施設では、そのうち「職員数０人」の施設が１６施設であり、他の１３施設でも、「正規」且つ「専任」の職員が「常勤」しているという施設はなかった。

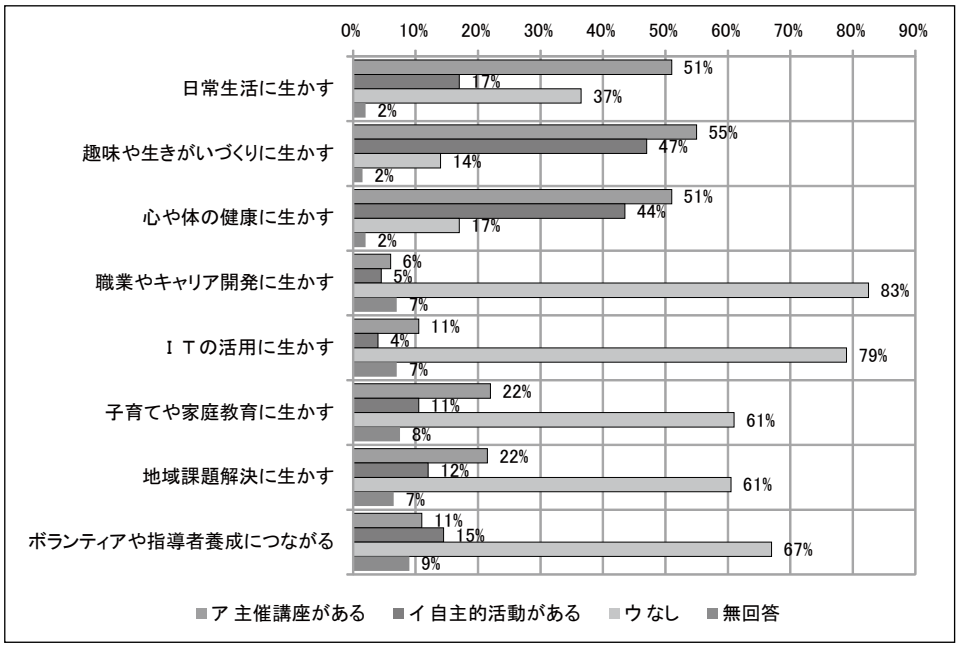
２　「学習の成果を生かす」ことにつながる講座について

貴施設では、下記のような「学習の成果を生かす」ことにつながる公民館講座や自主的なグループ等の活動が行われていますか。

○公民館が主な主体となって行っている講座がある　ア
○主に自主的グループや他の組織や団体が行っている活動がある　イ
○貴施設では行われていない　ウ

（施設）

項　　目	ア	イ	ウ	無回答	計※
①日常の生活の中に生かすことにつながる講座や活動	102	34	73	4	213
②趣味や生きがいづくりに生かすことにつながる講座や活動	110	94	28	3	235
③心や体の健康づくりに生かすことにつながる講座や活動	102	87	34	4	227
④職業やキャリア開発に生かすことにつながる講座や活動	12	9	165	14	200
⑤パソコン講習等、ＩＴの活用に生かすことにつながる講座や活動	21	8	158	14	201
⑥子育てや家庭教育に生かすことにつながる講座や活動	44	21	122	15	202
⑦地域課題や現代的課題の解決に生かすことにつながる講座や活動	43	24	121	13	201
⑧ボランティアや指導者養成、地域づくりへの参画など人材養成につながる講座や活動	22	29	134	18	203



※ア、イの両方とした回答があったため表の合計は２００を超えることがある。また、グラフは２００施設を母数としているため、各項目におけるそれぞれの回答の合計が１００％を超えることがある

「公民館が主な主体となって行っている活動がある（ア）」と回答した割合は、「①日常の生活の中に生かす」が５１％、「②趣味や生きがいづくりに生かす」が５５％、「③心や体の健康づくりに生かす」が５１％と過半数を超えている。また、「自主的なグループ等が行っている活動がある（イ）」の回答も、②③については、他の項目と比較して高い割合を示した。

一方、平成１１年に生涯学習審議会答申において、「学習の成果を生かす具体策」として示された「個人のキャリア開発に生かす」「ボランティアに生かす」「地域社会の発展に生かす」の内容に関連する④⑦⑧や、平成２０年の中央教育審議会答申において具体的方策として示された「情報通信技術の活用」に関連する⑤、また、平成１３年に社会教育法の改正で加えられた「家庭教育に関する学習機会の提供」に関連する⑥等、一連の答申や法改正により示されてきた方策が行われている割合は、①②③と比較して低い値を示している。

☆　一連の答申等で示された方策に関する講座と「学習の成果を生かす」ことにつながる講座との実施状況の関連性

（施設）

④～⑧が複数行われている施設	61
そのうち①～③が全部行われている施設	54
割合	89%

（施設）

④～⑧が０または1つだけ行われている施設	139
そのうち①～③が全部行われている施設	63
割合	45%

④～⑧が複数行われていると回答した６１施設のうち、①～③を全て当てはまるとした施設は５４施設(８４％)あった。

一方、④～⑧を一つも当てはまらないか一つだけ当てはまるとした施設１３９施設のうち、①～③を全て当てはまるとした施設は６３施設(４５％)あった。

両者の割合には４４ポイントの差があることから、一連の答申や法改正により示されてきた方策(④～⑧)が行われている施設は、①～③も行われている割合も高いという結果が得られた。

３　「学習の成果を生かす」ことにつながる取組について

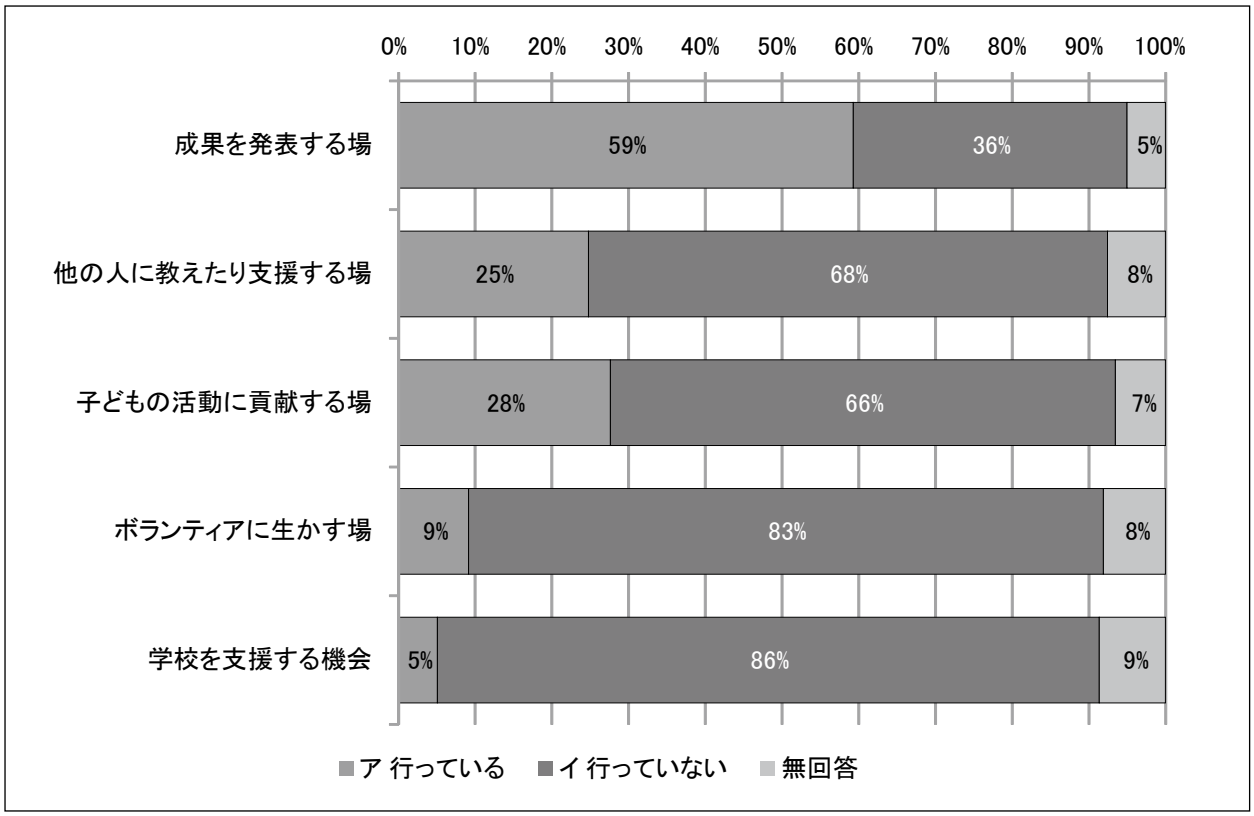
貴施設では、下記のような「学習の成果を生かす」ことにつながる取組を行っていますか。

〇行っている　ア

〇行っていない　イ

（施設）

	ア	イ	無回答	不明	計
①学習の成果を発表する場の設定や機会の提供	118	71	10	1	200
②学習の成果や経験を他の人に教えたり支援したりする場の設定や機会の提供	49	134	15	2	200
③学習の成果や経験を生かして子どもたちの体験活動や文化活動に貢献する場の設定や機会の提供	55	131	13	1	200
④学習の成果や経験をボランティア活動に生かす場の設定や機会の提供	18	163	16	3	200
⑤学校を支援する人材の募集や養成、マッチング等	10	170	17	3	200



「①学習の成果を発表する場の設定や機会の提供」は、５９％が行っているが、一方で、「②学習の成果や経験を他の人に教えたり支援したりする」（２５％）、「③子どもたちの体験活動文化活動に貢献する」（２８％）と、「④ボランティア活動に生かす」（９％）、「⑤学校を支援する人材の募集や養成、マッチング等」（５％）とでは、それぞれで大きな差が見られた。

学習の成果を発表する場は、約６割の施設で設定されているのに対して、学習の成果を生かして他者への支援や子どもの活動に貢献する場を設定している割合は全体の四分の一程度にとどまる。さらに、ボランティアの場の設定や機会の提供と、学校支援のためのマッチング等については、行っている施設は１割程度に過ぎないという結果が得られた。

☆　地域や学校、子ども等への貢献に関する取組と「学習の成果を生かす」ことにつながる取組との実施状況の関連性

（施設）

②～⑤を複数行っている施設	33
そのうち①を行っている施設	33
割合	100%

（施設）

②～⑤を０または1つだけ行っている施設	167
そのうち①を行っている施設	84
割合	50%

②～⑤を複数行っていると回答した３３施設のうち、①を行っていると回答した施設は３３施設（１００％）全てであった。

一方、②～⑤を全て行っていないか一つだけ行っていると回答した施設１６７施設のうち、①を行っていると回答した施設は８４施設（５０％）であった。

両者の割合に５０ポイントもの差があることから、学習の成果を地域や学校、子どもの活動等への貢献に関する取組を行っている施設は①も行っている割合が高いという結果が得られた。

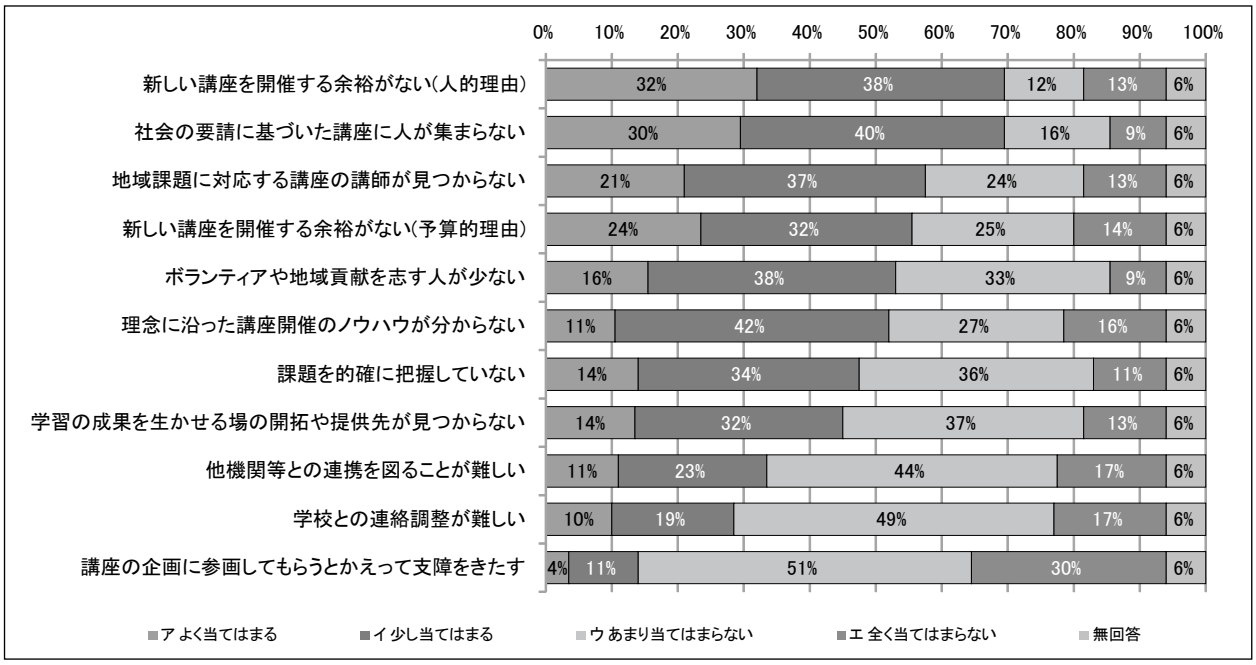
４　学習の成果を生かす取組を行う上での課題について

生涯学習の理念に沿った「学習の成果を生かす」講座や取組を行う上で課題と感じていることはどんなことですか。

〇よく当てはまる場合には　ア
〇少し当てはまる場合には　イ
〇あまり当てはまらない場合には　ウ
〇全く当てはまらない場合には　エ

（施設）

	ア	イ	ウ	エ	無回答	計
①職員の減少や多忙により新しい講座を開催する余裕がない	64	75	24	25	12	200
②社会の要請に基づいた講座を行ったときに人が集まらない	59	80	32	17	12	200
③地域課題に対応した講座を開催するときに適当な講師が見つからない	42	73	48	25	12	200
④予算的な理由により新しい講座を開催する余裕がない	47	64	49	28	12	200
⑤ボランティアや地域貢献を志す人が少ない	31	75	65	17	12	200
⑥理念に沿った講座開催のノウハウがわからない	21	83	53	31	12	200
⑦地域課題や現代的課題を的確に把握していない	28	67	71	22	12	200
⑧学習の成果を生かせる場の開拓や提供先が見つからない	27	63	73	25	12	200
⑨他機関や関係団体等との連携を図ることが難しい	22	45	88	33	12	200
⑩学校との連絡調整が難しい	20	37	97	34	12	200
⑪講座の企画に参画してもらうとかえって事業の推進に支障をきたす	7	21	101	59	12	200



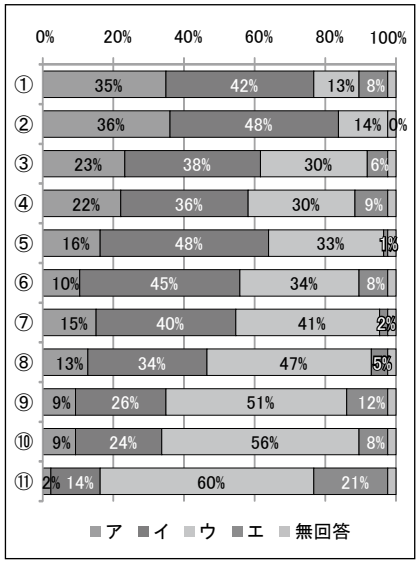
ア（よく）、イ（少し）を合わせた「当てはまる」の回答が多いのは、「職員の減少や多忙により新しい講座を開催する余裕がない」（７０％）、「社会の要請に基づいた講座を行ったときに人が集まらない」（７０％）である。他に「地域課題に対応した講座を開催するときに適当な講師が見つからない」「予算的な理由により新しい講座を開催する余裕がない」「ボランティアや地域貢献を志す人が少ない」で「当てはまる」の回答が半数を超えた。

一方、他との連携に関わる「学習の成果を生かせる場の開拓や提供先が見つからない」「他機関や関係団体等との連携を図ることが難しい」「学校との連絡調整が難しい」の３項目は、いずれも過半数を超えていない。

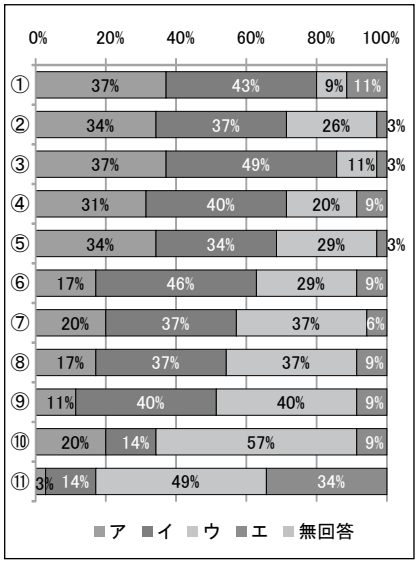
また、「新たな公共」に関わる「講座の企画に参画してもらうとかえって事業の推進に支障をきたす」の項目を「当てはまる」とした回答が１５％見られた。

☆　１における④～⑧の取組、２における②～⑤の取組の実施状況と取組を行う上で挙げられる課題との関連性

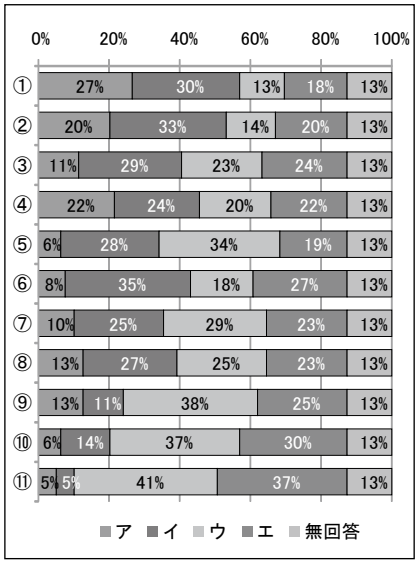
A)1、2において④～⑧や②～⑤を複数行っている施設



B)1、2いずれかで④～⑧や②～⑤を一つ行っている施設



C)1、2において④～⑧や②～⑤を一つも行っていない施設



上記は、地域課題の解決や地域の活性化に向けた内容の取組状況別に表したグラフである。「よく当てはまる」「少し当てはまる」を合わせた回答を前頁の全体の結果と比べると、

○ A は①が最大ではなく②が最大である。

すなわち「人的理由により新しい講座を開催する余裕がない」ことよりも、「社会の要請に基づいた講座を行ったときに人が集まらない」ことを課題として捉える回答が多い。

○ B は③が最大で９割に近い。すなわち、「地域課題に対応した講座の講師が見つからない」を課題として捉えている施設が最も多く「人的理由により新しい講座を開催する余裕がない」がそれに続く。

○ C はどの項目も課題として「当てはまらない(エ)」という回答の割合が A、B と比べて明らかに高い。それぞれの項目が課題として捉えられていないという傾向が伺われる。また、無回答とした全ての施設が、全部の項目を無回答としており、そのほとんどは、常勤の職員がいない施設であった。

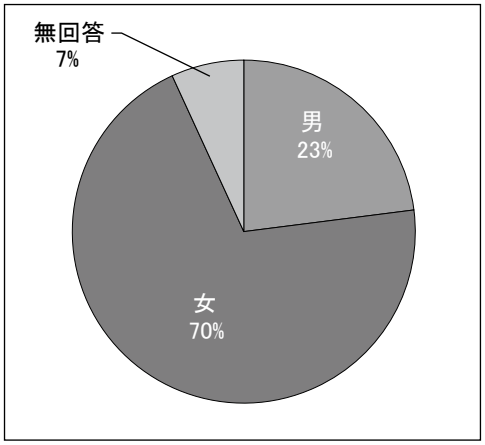
〔調査２〕公民館利用者に対するアンケート調査

１　あなたについてお答えください。

（１）性別（男・女）

（人）

男	248
女	757
無回答	74
計	1079

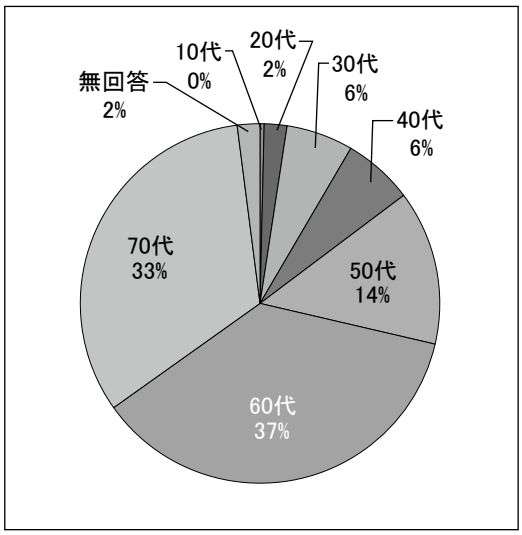


本調査では、回答者全体の２３％が男性、７０％が女性である。

（２）年令（19歳以下・20～29歳・30～39歳・40～49歳・50～59歳・60～69歳・70歳以上）

（人）

10代	4
20代	22
30代	65
40代	68
50代	150
60代	394
70代	354
無回答	22
計	1079



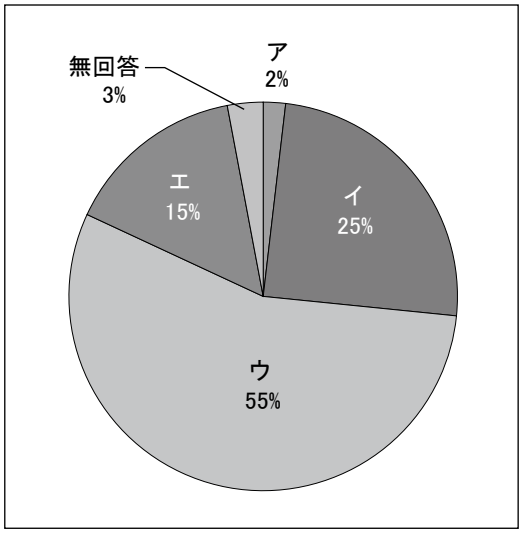
６０代、７０代の公民館利用者による回答者が多く、この年代層で回答者全体の７割を占めている。

（３）あなたは公民館をどのくらいの頻度で利用しますか。

ア）ほぼ毎日　　イ）週に数回程度　　ウ）月に数回程度　　エ）年に数回程度

（人）

ほぼ毎日	20
週に数回	267
月に数回	597
年に数回	163
無回答	32
無効	0
計	1079



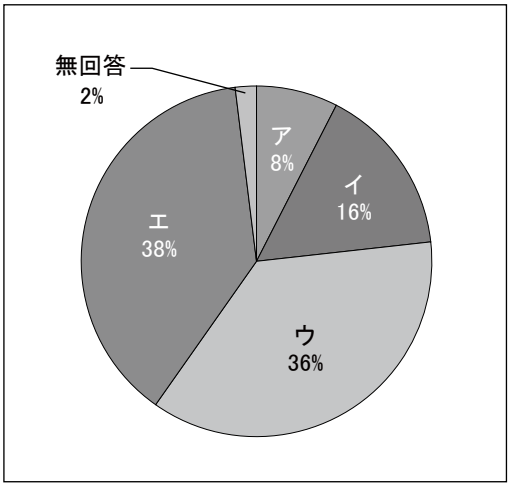
「月に数回」が最も多く、次いで「週に数回」が続き、この２項目を合わせると８０％を占める。

（４）あなたは「秋田県生涯学習ビジョン」を知っていますか。

ア)よく知っている　イ)大まかな内容を知っている　ウ)言葉だけ知っている　エ)知らない

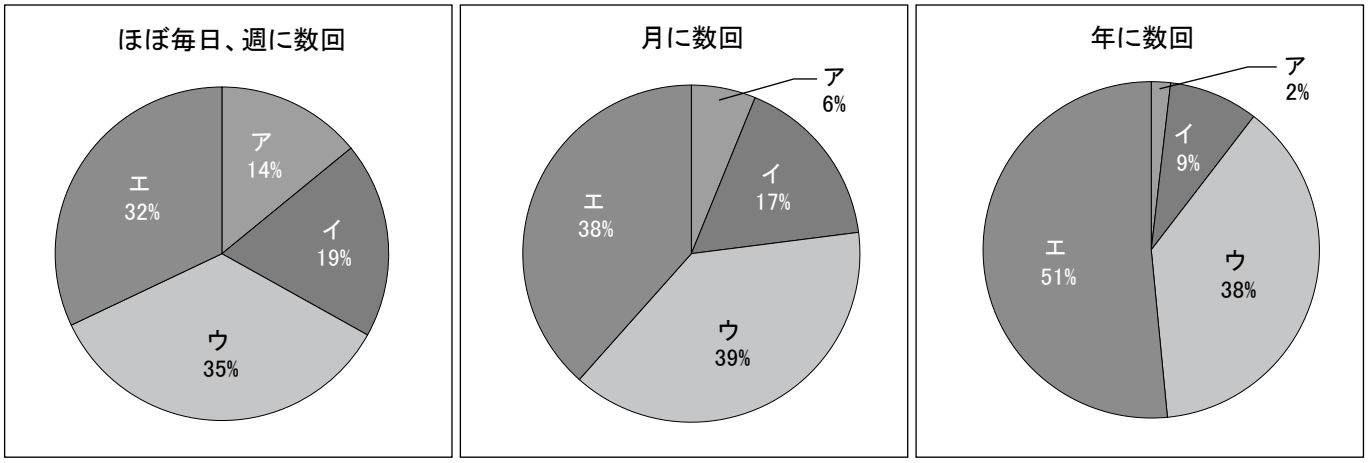
（人）

よく知っている	81
大まかに内容を知っている	169
言葉だけ知っている	393
知らない	412
無回答	21
無効	3
計	1079



ア、イ、ウの合計６０％は、秋田県生涯学習ビジョンについて何らかの認識があると判断できる。そのうち、内容まで認識しているア、イの回答者の割合が２４％あった。

☆　公民館の利用頻度と「秋田県生涯学習ビジョン」の認知度の関連性



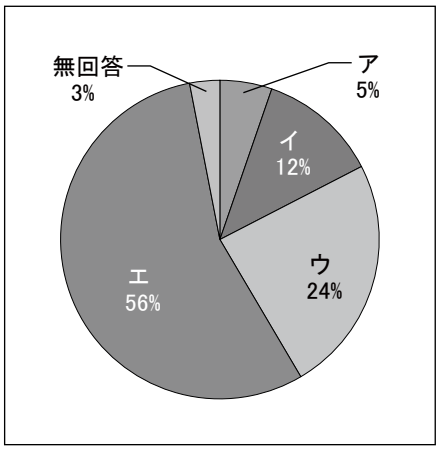
公民館を多く利用する人ほど「秋田県生涯学習ビジョン」に対する認知度は高い傾向が見られた。

（５）生涯学習ビジョンに示された「行動人（こうどうびと）」を知っていますか。

ア)よく知っている　イ)大まかな内容を知っている　ウ)言葉だけ知っている　エ)知らない

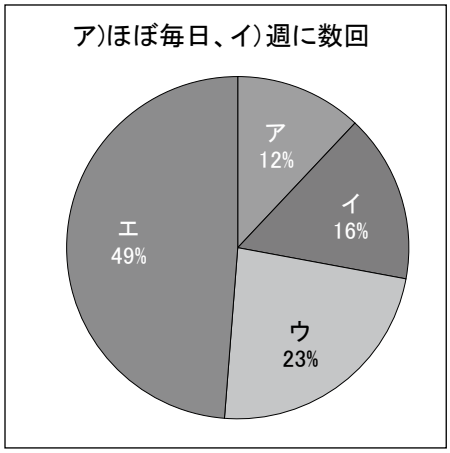
（人）

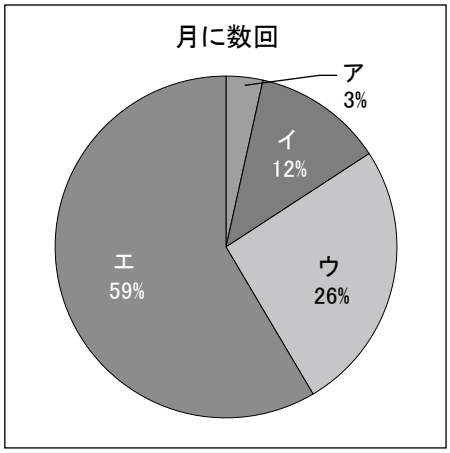
よく知っている	57
大まかに内容を知っている	131
言葉だけ知っている	260
知らない	598
無回答	33
無効	0
計	1079

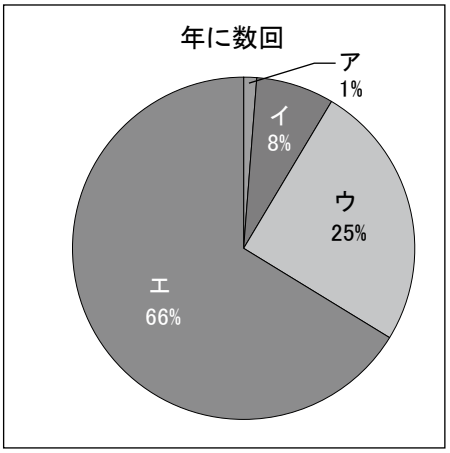


ア、イ、ウの合計が４１％と、前問の秋田県生涯学習ビジョンよりも認知度が低いという結果が得られた。

☆公民館の利用頻度と「行動人」の認知度との関連性







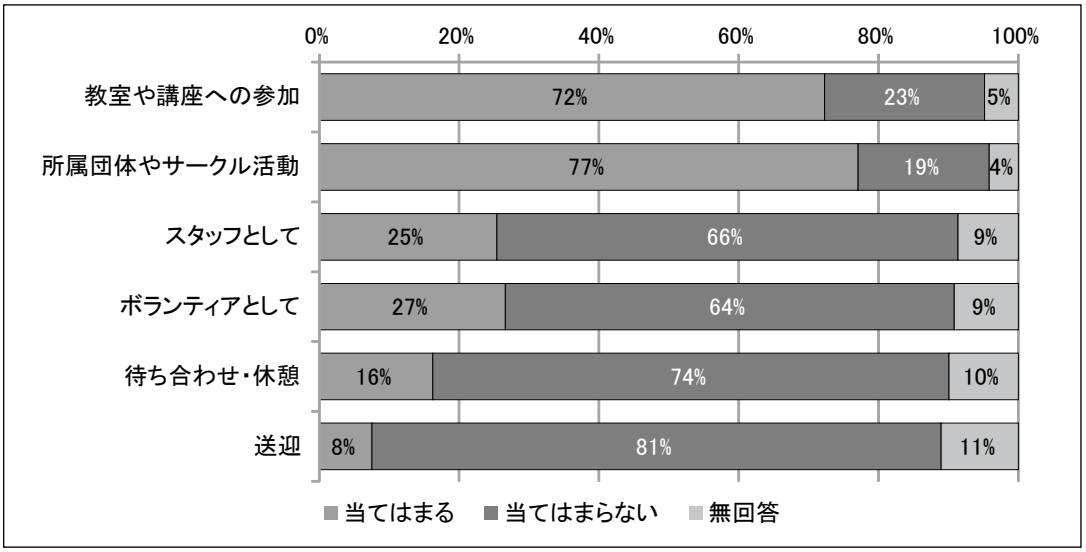
公民館の利用頻度が高い人ほど「行動人」に対する認知度は高い傾向が見られた。

（６）あなたがふだん公民館を利用する目的はどんなことですか。
当てはまる場合には［ア］　・当てはまらない場合には［イ］

（人）

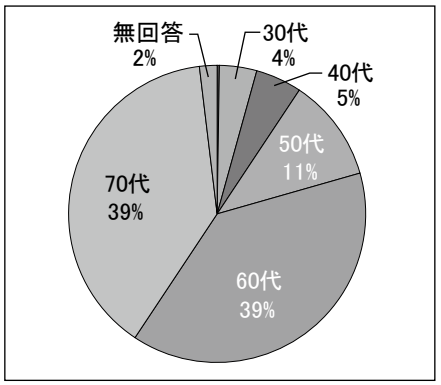
	ア	イ	無回答	計
①教室や講座への参加	780	247	52	1079
②所属団体やサークル等の活動	832	202	45	1079
③講座や教室の講師やスタッフとして活動する	274	712	93	1079
④ボランティアとして活動する	287	693	99	1079
⑤待ち合わせや休憩等のため	175	797	107	1079
⑥家族等の送迎のため	81	879	119	1079

教室や講座への参加、所属団体やサークル等の活動等での利用の割合が高い。



☆　スタッフやボランティアとして活動していると回答した人の年代

全体の回答者の比率は６０代･７０代の割合が７０％と高かったが、スタッフやボランティアとして参加している年代も、６０代･７０代の割合が７７％とさらに高い結果が得られた。



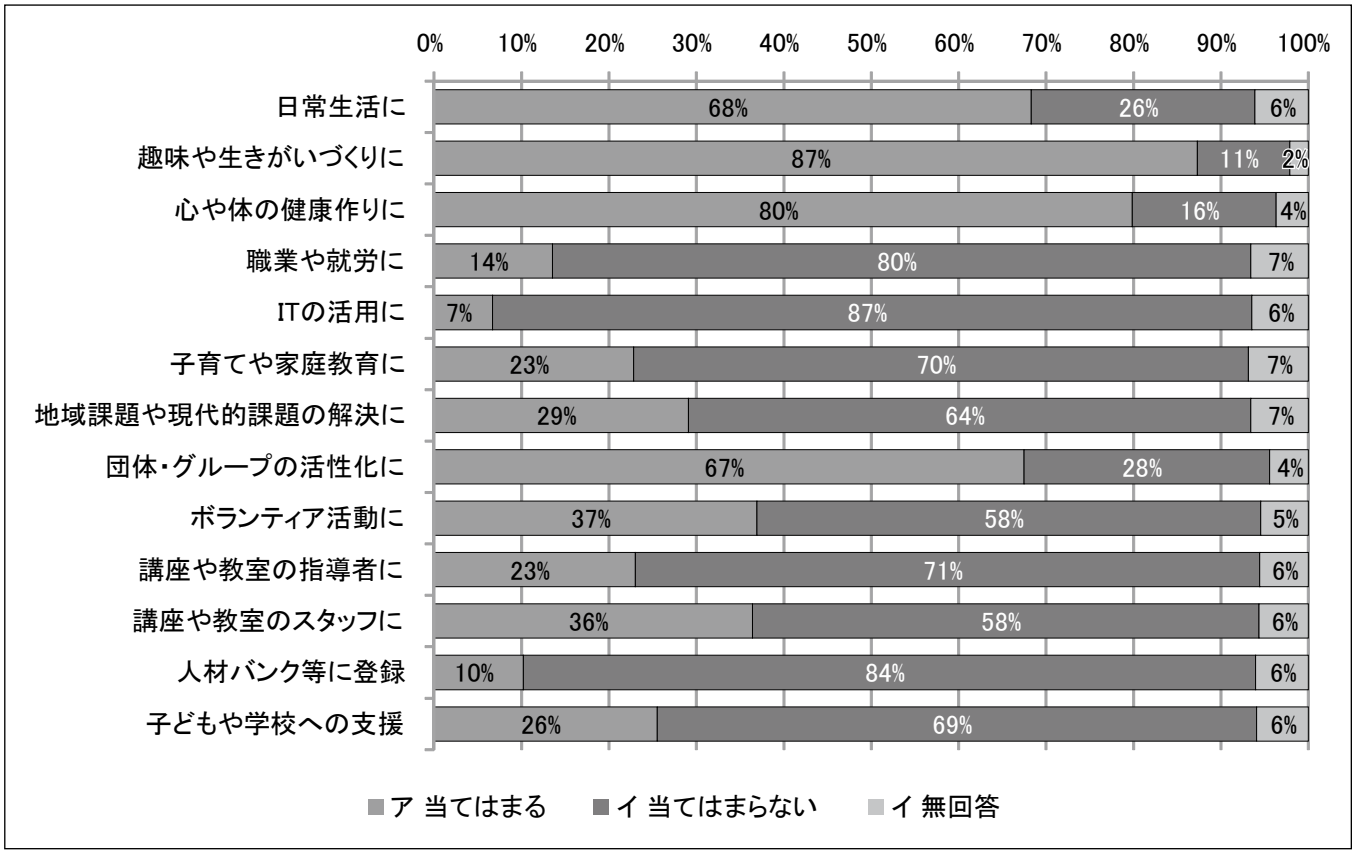
２　あなたの経験や考えについてお答えください。

（１）あなたは、あなたが普段行っている生涯学習で身につけた成果をどのようなことに生かしていますか（生かしたことがありますか）。

当てはまる場合は［ア］　当てはまらない場合には［イ］

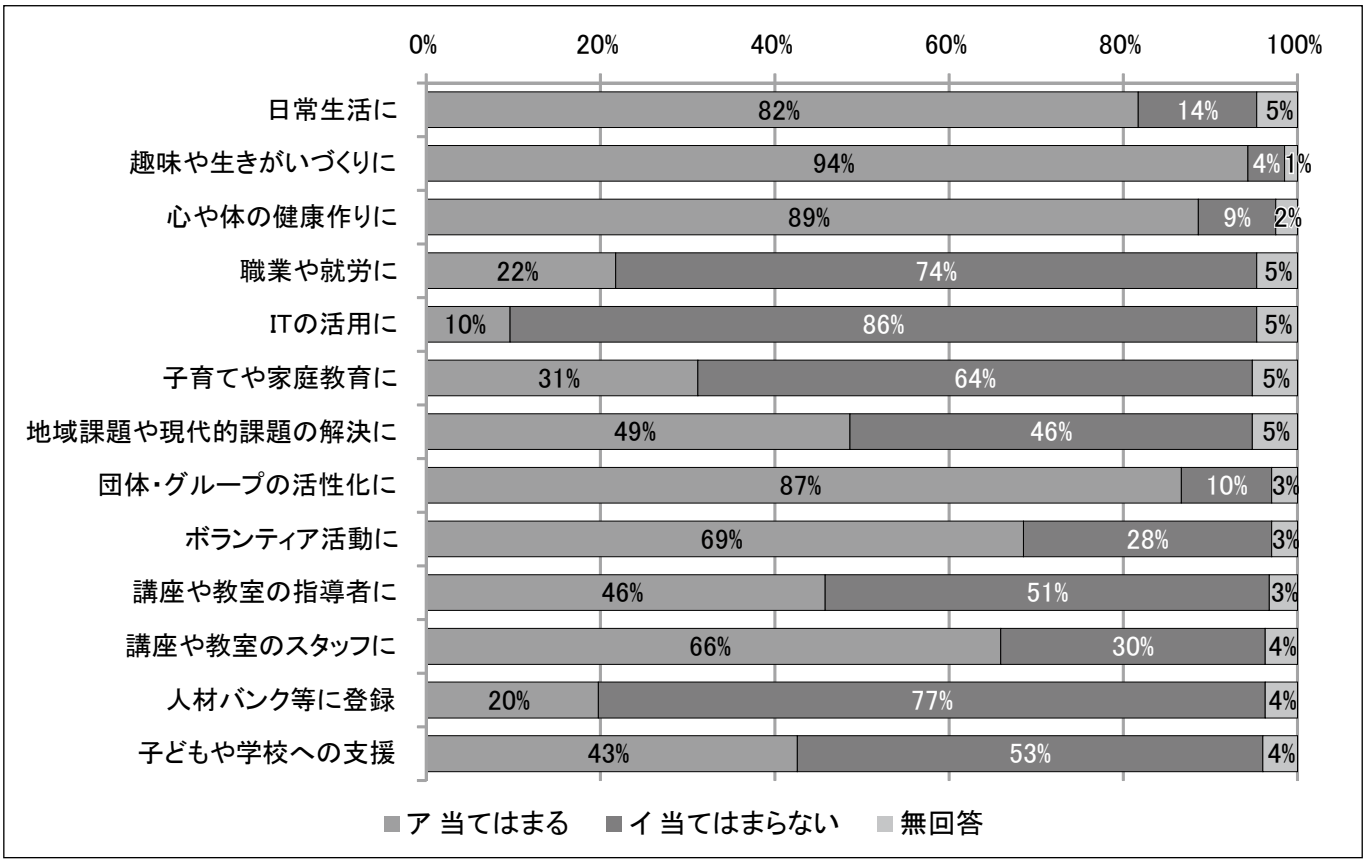
（人）

	ア	イ	無回答･不明	計
①日常の生活の中に生かしている	737	276	66	1079
②趣味や生きがいづくりに生かしている	942	114	23	1079
③心や体の健康づくりに生かしている	860	177	42	1079
④職業や就労に生かしている	146	862	71	1079
⑤パソコンやスマートフォンなどITの活用に生かしている	72	937	70	1079
⑥子育てや家庭教育に生かしている	246	758	75	1079
⑦地域の課題や現代的課題を解決することに生かしている	314	694	71	1079
⑧自分の所属する団体･グループ等の活性化に生かしている	728	303	48	1079
⑨ボランティア活動に生かしている	398	621	61	1079
⑩講座や教室の指導者となったことがある	248	770	61	1079
⑪講座や教室のスタッフとして活動したことがある	393	625	61	1079
⑫人材バンクやボランティアバンク等に登録をした	110	903	66	1079
⑬地域の子どもたちの学校外活動や学校支援に生かしている	275	739	65	1079



全体としては、「日常生活に」「趣味や生きがいづくりに」「心や体の健康作りに」「所属団体・グループの活性化等に」生かしている割合が高い。学びを自分自身のために生かしている傾向があることが伺える。

☆　スタッフやボランティアとして公民館を利用する人



１（６）でスタッフやボランティアとして活動している人は、どの項目でも全体の平均値より高い。

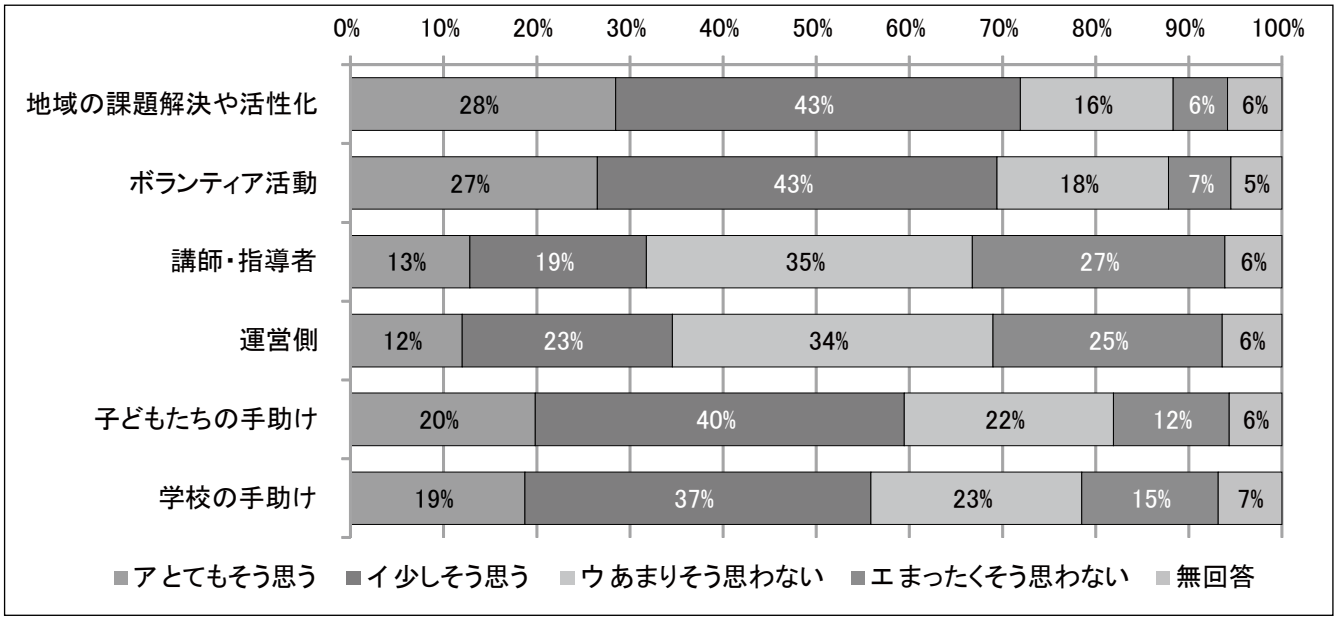
（２）あなたは生涯学習の成果や経験を生かして、次のような活動をしたいと思いますか。

・とてもそう思う　ア　　・少しそう思う　イ

・あまりそう思わない　ウ　　・まったくそう思わない　エ

（人）

	ア	イ	ウ	エ	無回答･不明	計
①地域の課題解決や活性化に役立つような活動をする	307	469	177	63	63	1079
②ボランティア活動をする	285	461	198	72	63	1079
③講座の講師や指導者として活動する	138	204	377	292	68	1079
④講座の計画や運営を行う側の立場に立って活動する	129	243	371	265	71	1079
⑤子どもたちが地域で行う体験活動や文化活動の手助けをする	214	427	242	134	62	1079
⑥地域にある学校の手助けになるような活動をする	202	401	244	158	74	1079

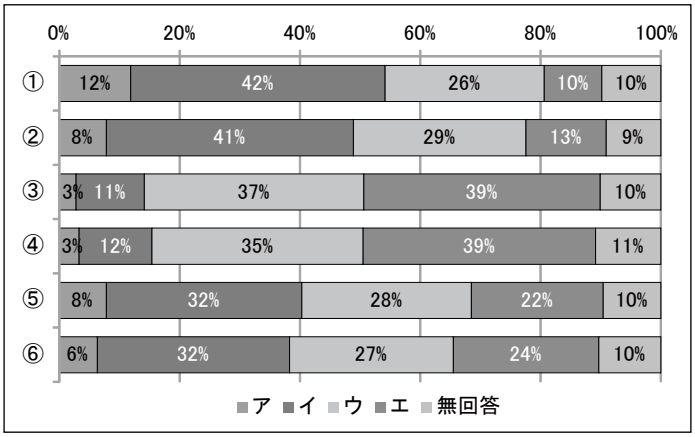


ア（とても）、イ（少し）を合わせた「そう思う」の割合が多いのは、順に「①地域の課題解決や活性化に役立つ活動をする（７１％）」「②ボランティア活動をする（７０％）」「⑤子どもたちが地域で行う体験活動や文化活動の手助けをする（６０％）」「⑥地域にある学校の手助けになるような活動をする（５６％）」である。この４つの内容に対しては地域住民が生涯学習の成果や経験を生かしたいという意識は比較的高いと判断できる。これに対して、講師や指導者、運営側に立った活動をすることに関してはア、イの合計が半数に満たない。

１（６）でスタッフやボランティアとして活動している人の回答は、「とても思う」の割合が高い。講師や指導者、運営側の活動に対しては消極的な傾向は変わらない。

☆　公民館利用者(学習者)のうち地域貢献的な活動をしていない人の意向

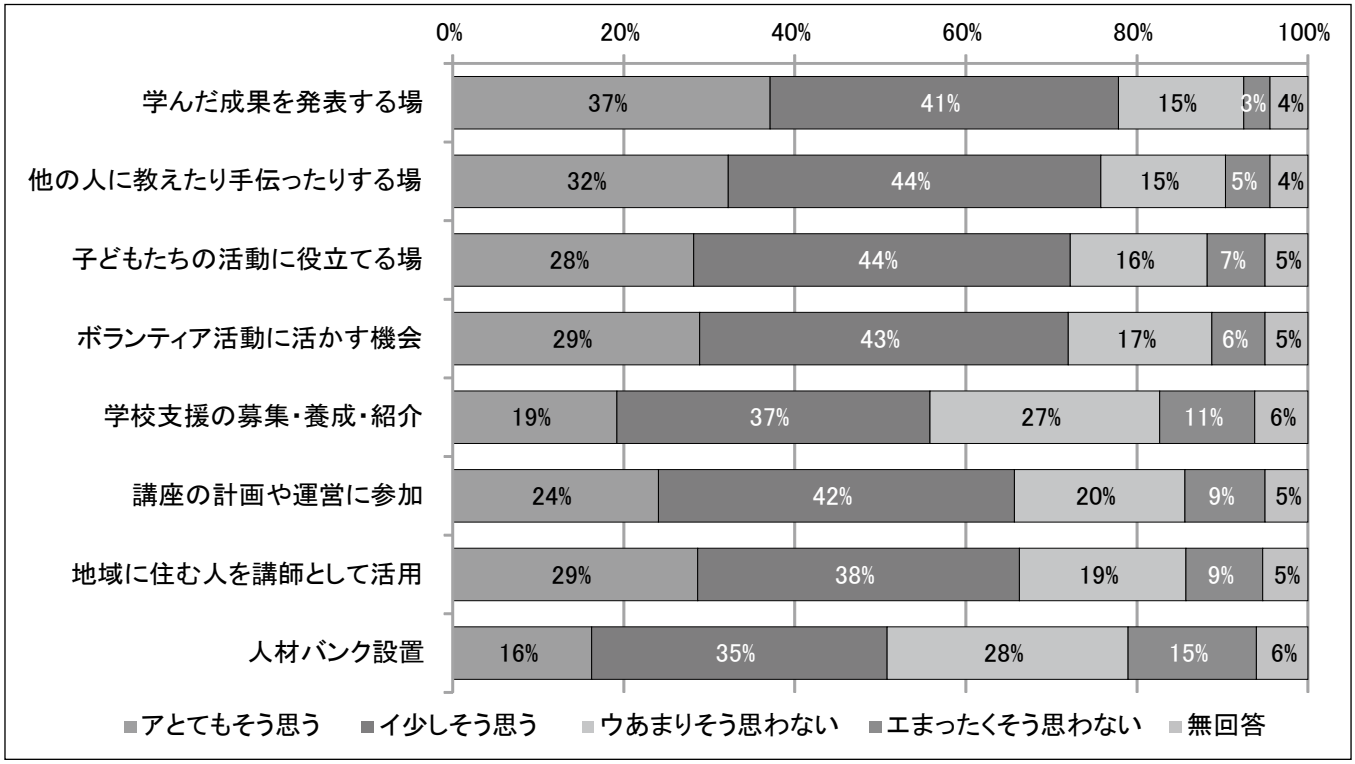
公民館利用者のうち、「待ち合わせや休憩」「家族等の送迎」を除いた回答者（ここでは「学習者」と呼ぶ）のうち、２（１）において⑦⑨⑩⑪⑫⑬の地域貢献的な活動を一つもしていない人に限定してグラフに表した。上記グラフと比較すれば活動をしたい割合は各項目２０ポイント前後減少するが、地域貢献的な活動をしていない人も「地域の課題解決や活性化に役立つ活動」や「ボランティア活動」をしたいという回答者が約半数おり、「子どもたちの体験活動」や「学校の手助け」をしたいという回答も４割程度いるという結果が得られた。



（３）生涯学習の成果を適切に生かすことのできる社会を作るためにはどんなことが必要だと思いますか。次の①～⑧の内容について

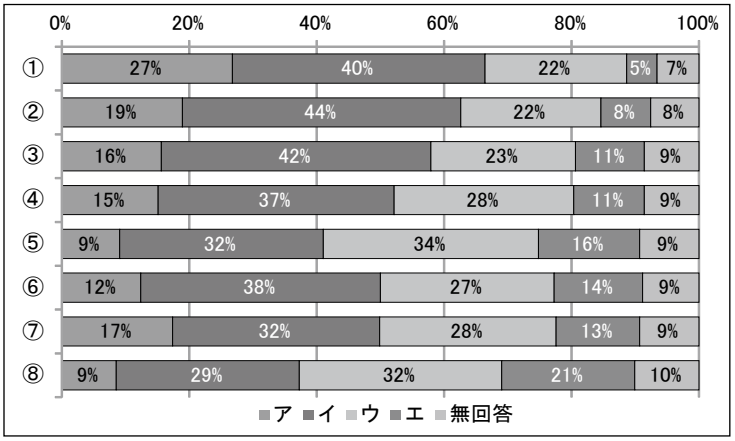
・とてもそう思う　ア　　・少しそう思う　イ
・あまりそう思わない　ウ　　・まったくそう思わない　エ

	ア	イ	ウ	エ	無回答・不明	計
①学んだ成果を発表する場や機会を多く作る	400	439	158	33	49	1079
②学んだ成果や経験を他の人に教えたり手伝ったりする機会を多く作る	347	470	157	56	49	1079
③子どもたちの体験活動や文化活動に役立てる機会を多く作る	304	475	173	73	54	1079
④学んだ成果や経験をボランティア活動に生かす機会を多く作る	311	465	181	67	55	1079
⑤学校を手伝う人材の募集や養成、紹介等を積極的に行う	207	395	290	120	67	1079
⑥住民が講座の計画や運営に参加する機会を増やす	259	449	215	101	55	1079
⑦地域に住む人を積極的に講師として起用する	309	406	210	97	57	1079
⑧人材バンク等を設置して登録を勧める	175	373	304	162	65	1079



「とてもそう思う」「少しそう思う」を合わせた割合が比較的多い。すべての項目で５０％を超えている。２（２）で「活動をしたいか」という問いでは大きく落ち込む項目も「必要なこと」と問われると、肯定的な割合が高くなるといえる。

☆　公民館利用者（学習者）のうち地域貢献的な活動をしていない人の考え

前問と同様の観点でグラフに表した。

上記グラフと比較すれば地域貢献的な機会を作ることが必要と考える回答の割合は１０~２０ポイント程度減少するが、各項目で４割から７割近くにまで達している。